

セッション報告：「マルサス書簡の中の知的交流」

代表者：柳田芳伸（長崎県立大学）

主要なイギリス古典派経済学者のうちで、今日に至るもいまだ全集が刊行されていないのは、T.R.マルサスのみである。マルサスの著作集は1986年に刊行されているが、そこにはマルサスと同時代人達との間の書簡は殆ど収められてはいない〔井上琢智「T.R.マルサス(1766-1834)の自筆書簡下書き」『時計台』第80号(関西学院大学図書館、2010年)20頁を参照〕。本報告では、世界の各所に所蔵されているマルサス書簡〔R.P.Sturges, *Economists' Papers 1750-1950*(London:Macmillan Press Ltd.,1975), pp.70-1、橋本比登志著『マルサス研究序説』(嵯峨野書院、1987年)93-5頁、Hashimoto,H., "Three Unpublished Letters of Malthus," *History of Political Economy*, Vol.22, No.2 (Summer,1990)pp.353-8、久保芳和著『スミス・マルサス研究論集』(大阪経済法科大学出版、1996年)198-9頁、Hitoshi Hashimoto & John Pullen, "Two More Unpublished Malthus Letters in Japan," *History of Political Economy*, Vol.28, No.2, (Summer,1996),pp.295-305、及び Hitoshi Hashimoto & John Pullen, "Two Unpublished Letters of Malthus," *History of Political Economy*, Vol.37, No.2, (Summer, 2005),pp.371-9などを参照〕の一部(未刊を含む)を利用し、マルサスとその時々、W.ゴドウィン、H.パーネル、F.ホーナー、F.ジェフリー、T.チャーマーズ、R.J.ウィルモットーホートン、およびW.ヒューウェルと遣り取りした書簡の読解を手がかりにして、マルサスと彼らとの知的交流の軌跡を辿りながら、既存の研究を幾許かでも豊富化しようと試みたい。

1. 今日では、もはや歴大ともいふべき内外における既存のマルサス研究の成果から多くを学べる(田中 育久男「わが国におけるマルサス研究の動向」『マルサス学会年報』第20号、2011年を参照)。それらの大多数はマルサスの諸著作、とりわけ主著である『人口論』(初版1798年、生前最終版1826年)と『経済学原理』(初版1820年、2版は没後の1836年)の読解を通して、解釈、理解されてきたものといえる。それらの中には、最終的に推察によって論じているものも少なからず見受けられる。そこで、本報告では、ほんの一部にとどまるものの、マルサスの同時代人への手紙やそれに対する返信を考証することで、それらの推考の正否や適否を再考する材を付与しようとするものである。もとより私信はあくまでも2次的資料にとどめるべき性格のものではあろう。けれども、それでもなおマルサス自身の旅行日記(拙論「マルサスの『北欧旅行日記』瞥見」『長崎県立大学論集』第36巻第4号、2003年を参照)や、東インド・カレッジでの講義録(拙論「マルサスの東インド・カレッジ擁護論」『長崎県立大学論集』第35巻第4号、

2002年を参照)、ならびに説法録や備忘録(柳澤哲哉「書評 John Pullen and Trevor Hughes Parry ed. *T.R.Malthus : the unpublished papers in the collection of Kanto Gakuen University* vol.2, Cambridge Univ. Press, 2004」『経済学史研究』47-1、2005年、106頁を参照)と共に、極端な推論に対して時として有益な反証を提出しうるであろう。したがって本報告は何よりもまず、地道に真のマルサス像を描き出していこうとする研究に資するものとする。

2. 例えば、1807年以降A.ハミルトンを介してマルサスとの親交を深めていったF.ジェフリーは、エディンバラ大学で経済学を講じたD.スチュアートの高弟の1人であった。他の多くの門下生がマルサスに冷淡であったのに対し、ジェフリーは終始マルサス支持者であった。マルサスが『エディンバラ・レビュー』誌と関わりがもちえたのは編集者ジェフリーの厚情によるところが大である。そのさいジェフリーがどれほどマルサスの著作の意義を理解し、マルサスを支持していたのか。こうした視点から、両者の手紙が検討される。

また、1830年前後にW.ヒューウェルとの間で遣り取りされた4通の私信は、マルサスが単純な帰納主義経済学者でなかったことを傍証するであろう。既に、山崎はこれを邦訳している(「マルサスからヒューウェルへの4通の書簡」(翻訳)、『福岡大学経済学論叢』第56巻第3・4号、2011年)。

さらに、マルサスが1832年の3月6日付けでT.チャーマーズに宛てた手紙(これまでにその全文は公刊されていない原資料、但しその断片は、Patricia James, *Population Malthus*, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1979, pp.431-3に収録されてはいる)もマルサスの課税論等の究明には極めて重要な材となろう。